

源氏物語入門（抄）

池田亀鑑

I 源氏物語の梗概

源氏物語は、『伊勢物語』のような歌物語や、『竹取物語』のような伝奇物語の流れをくむものですが、こうした民族的、口誦的、民譚的性格のつよい物語類に対して、『蜻蛉日記』や『枕草子』のような、自我意識や個人的性格の強い、新しい時代の文芸精神をも身につけて創作されたものがあります。もちろん、先人もしばしば論じたように、この物語は『伊勢物語』とか『宇津保物語』、または『蜻蛉日記』や中国の『白氏文集』、その他数々の先行文学の影響になつたものではありませんが、しかしそれ以上に、作者の独特の

世界観、人間観、そして小説構成の天分や技術によって創造された一大長篇小説——本居宣長の絶讃にならえば、後にも先にも類いなきすぐれた大作品といつてよいでしょう。

次にこの物語の梗概を構想の問題とも関連させながら、「桐壺」の巻から順次たどつてゆくことにしましょう。

この物語でまず最初に大切な人物は藤壺で、物語も藤壺の物語から始まる。ただしその藤壺を出すために、作者はプロローグとしてまず桐壺の更衣のことを詳しく書いたのです。それはいつの御代のことであつたか、大勢の女御や更衣がおられた中に、帝の御寵愛を一身に集めた、すぐれて美しい更衣として描かれた。更衣というのは、高い身分ではない。だから、よけいに彼女は、第一皇子の生母である弘徽殿の女御をはじめとして、多くの婦人達の嫉妬を受けました。その上に、玉のような男み子——すなわち源氏——を生んで、御

寵愛がいよいよまさるにつけ、人々の嫉妬や憎しみがつもって、ついに病気になる、間もなくはかなくなってしまうた。帝のお歎きはたとえようもなく、野分の風が吹く夕べなどはとくに思い出されることが多くて、更衣の母君のわび住いへ女官をつかわされ、その帰りを待ってしみじみと故人のことを語り合われ、涙に沈みなどされる。御追慕の情があまり強くて、その後はなき更衣の代わりに立つほどの人もなかったが、ある時、先帝の四の宮がなき更衣に生き写しだと奏上した人があったので、帝はねんごろに所望され、ついに入内ときまった。この人が藤壺です。世の人は、輝く日の宮と呼んでその美しさを讃えたという。

さて源氏の方は——源氏というのは、皇子が臣下の籍に下った場合に賜わる姓ですが、これは前に帝が、皇子の将来を有名な高麗の相人に占わせてみられたところ、国家の柱石として天下を輔佐する方がよいと奏上したので、臣下とされたのですが、この源氏がまた

成長するにつれて、実に美しい。世の人は誰いうとなく光の君と呼ぶようになった。学問も芸ごとも行くとして可ならぬはない。十二歳の時には元服の式が挙げられ、今を時めく左大臣の姫君の葵の上が妻とさだめられた。葵の上は源氏よりも四歳年長で、美しい人だが、ひどく気位が高く、その上冷くて無表情で、源氏にはどうしても親しめない。母を知らない源氏の心が、なき母に生き写しだときく藤壺に傾いてゆくのは当然でしょう。母性的なものは、女性的なものなのです。子供の頃にはよく父帝のお伴で逢うことができた藤壺にも、成長した後はめったに逢うこともなく、若い源氏はうつうつとして、私邸の二条院や宮中の宿直所で夜を送ることが多かったです。そうして、時にその憂うつにたえられない場合は、花やかな宮中の社交生活に我を忘れようとした。六条御息所や花散里や朝顔の姫君や、あるいは筑紫の五節などが彼の心をとらえた。しかし、いずれもそれは藤壺に対する達しえぬ思慕の変形で、そうしたいくつもの

恋を重ねながら、源氏の心に堆積してゆくものはいよいよまさる藤壺への思慕ばかりだったというふうにかきたい。（以上「桐壺」の巻）

そのようにして幾年かたった。十七歳の夏、五月雨の晴れ間もないある夜、源氏は宮中の宿直所で、葵の上の兄の頭中将や、左馬頭、藤式部丞などから、いろいろと珍しい女性論をきいた。女性について、めいめいの体験を基礎にしての懺悔話や失敗談は、夜のふけるのも忘れさせるほど面白かったが、とくに源氏はその座談の中から、よい女というものが、必ずしも自分の住む上流社会にばかりいるとは限らないこと、思いがけぬすばらしい女が、中流社会の、ことに荒れはてた葎の宿などにいることなどを知って、大いに啓発されたのです。これは「雨夜の品定め」といって有名な段ですが、場面を座談会の形にしている、大変おもしろい。頭中将の懺悔話の中に出

てくる、はかなげな女性は夕顔のことですが、この品定めのおのこ
と、源氏は空蟬、夕顔と、ほとんど同時に中流社会の女性と恋をす
る。

空蟬は伊予介という年老いた男の若い後妻です。雨夜の品定め
翌日、源氏はいったん葵の上を訪れたが、相も変わらず人形
のように冷たく無表情なので失望するところへ方違えのために、
中川にある紀伊守の家に出かける必要が起こった。紀伊守は伊
予介の子ですが、継母にあたる空蟬がその家に来合せているこ
とを話すと、源氏は非常に好奇心をそそられ、夜更けてその部
屋に忍んでゆく。空蟬は源氏の真情はこぼみきれないが、人妻
の身をかえりみて非常に煩悶する。それははかなく明けやす
い、夏の一夜の夢のような出来事でしたが、しかし源氏はそ
れを一夜かぎりのこととはしてしまえない。空蟬の弟の小君
をせめて、何とかもう一度あいたいと苦心する。そのうち紀
伊守が任国に下り、女ばかりになった家に、源氏は

小君としめし合せてそつと出むいた。ちようど空蟬は継娘の軒端の萩と碁をうっている。軒端の萩はよく肥って愛嬌のある娘だが、少しつつしみがたりない。やがて二人が寝についたところを見はからって、源氏は空蟬のところへ忍び入る。空蟬はいち早くそれと気づいて、小桂をぬぎすべらしたまま部屋を出てしまふ。源氏はやむなく軒端の萩と一夜を過し、空蟬の残しておいた衣をもつて二条院に帰り、人知れずそのうつり香をなつかしむ。いっぽう空蟬は、小君が持ってきた源氏の歌をよみ、その筆蹟をじつと見つめながら、その紙のはしに一首を書きつける。

空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かなこれは宇多天皇に愛された伊勢の御の歌なのですが、この場合に、昔同じような境遇で苦しんだ伊勢の歌をそのままもってきたのは、実にいい。蟬の羽におく露が木がくれに見えないように、わたしの袖はあなたを忍ぶ涙でぬれています、という意味です。人妻としての空

蟬の苦惱が、この歌に凝結されている。（以上「帚木」「空蟬」の巻）

さて、同じ年の夏、源氏は夕顔と知り合つた。それは六条御息所のもとへ通う道すがら、五条に住む乳母の病氣を見舞つた時、偶然みつけた貧しい家の、垣根に咲く夕顔の花にはじまる。貧しい家に住む美しい女、それは例の「雨夜の品定め」以来、源氏の脳裡をはなれない幻影でしたから。源氏の従者の惟光のはからいで、八月の十五夜、月明の夜に、はじめてこの家にとまつた。女の素性は分からない。源氏も身分を明かさない。はかないものに夢幻的な雰囲気を合せて、この物語は進行する。夕顔の家は、さきほど言つたように賤の伏屋なので、源氏は耳近くいろいろな話声や物音をききつける。しかし何とかもつと静かな所で、二人だけの世界をたのしみたいといふので、近くにある別荘に出かけたのです。古い別荘は荒れ

るにまかせて、森閑としており、何かしら妖気が漂っている。夕顔はその妖気におびえたように、終始じつと源氏に寄りそっている。宵すぎる頃、うとうととまどろむ源氏の枕もとに、きれいな女の姿が見えたと思うと、何か恐しい恨みごとを言つて、そばの夕顔をゆり起こそうとする。驚いて起き上ると燈火は消えて、あたりには陰惨な闇がよどんでいる。手をたたいて従者をよぶと、答えるものはいきなりだまばかり。やつと従者を起こして紙燭の光で照してみる。と、もう夕顔は死んでいる。驚愕と恐怖、悲しみと悔悟、源氏はさうした激しい感情の中に、死者を抱いて一夜を明かした。翌日は惟光の世話で東山に死骸を送つたが、一日おいても蘇生しないので、葬式を出すことになる。源氏はわざわざ東山におもむいて夕顔と別れを惜しんだ。生きている時と少しも変わらない美しい顔、ささやかなからだには、源氏の紅の衣があゝの時のままにかけてある。――その後、源氏は自分も死んだようになって床についてしまった。こ

の夕顔こそ、雨夜の品定めするとき頭中将が話した女で、二人の間には今年三つになる娘まであった。そのことを夕顔の侍女の右近の口から聞き知るのですが、源氏も右近も口外しなかつたので、夕顔の死はその後、二十年近く秘密の底にとじこめられてしまふのです。

(以上「夕顔」の巻)

夕顔の死は、その後ながく源氏の心に傷痕となつて残り、その上に、同じ年の冬には、空蟬が伊予介にともなわれて、はるばる任国の伊予へ下り、寂寥はいよいよ彼の心に積つていった。翌年の春、源氏は静養と病氣治療のために、人にすすめられて北山に住む加持の名僧をおとずれた。加持のひまに山中をそぞろ歩きして、ふと見いだした小柴垣の庵室を、夕ぐれの霞にまぎれて立ちのぞくと、年老いた上品な尼君と共に、十歳くらいのかわいい姫君がいた。源氏はひどく心をひかれる。それは姫君が、あの、夢にも忘れることの

できない藤壺の宮に生き写しだったからです。よくたずねてみると、それもそのはず、姫君は藤壺の兄君の兵部卿の宮の娘で、母はすでになく、祖母にあたる尼君のもとにひきとられているという。自分と同じ母のない子、しかもあのようなかわいい姫君を手もとにひきとって理想的に育て、藤壺の宮の代わりとして明けくれの慰めに見ることができたら、と源氏は都に帰ってもそのことばかり考えていたのです。

ちようどその頃、藤壺は軽い病気で里に下っておられた。又とない、よい機会だ。源氏は前後の分別もなく、藤壺の侍女の王命婦を語らつて、必死の思いで藤壺のもとに忍ぶ。藤壺はまた必死の思いでそれを拒んだ。あのあやまちだけは二度とくり返すまいと——実は二人の間にかつて一度あやまちがあつた。それは今ある源氏物語には書いてない。もしそれが書かれたとすれば「桐壺」の巻と「帚木」の巻の間になければならないのだが、それが無い。わたくしが

いろいろ研究して得た結論では、「桐壺」の巻は、ずっと後になつて執筆されたもので、もとは、その前身ともいうべき、たとえば

「かがやく日の宮」というような巻があり、そこにいろいろと、源氏の宮中関係の恋愛が書かれていた。藤壺と源氏とのあやまちも、多分その中に書かれていたものと思う。とにかくそういう事実があったことだけは、あとの文章で察することができる。藤壺は桐壺の帝の後です。源氏は父みかどの大切な后を犯したことになる。藤壺は帝の後としての立場とは別に、源氏を愛していたのですが、その感情に身をまかせるには理性や倫理が許さない。しかし、源氏の熱情に対しては、藤壺もついに自制を失った。許されない関係を結んで、あとに来るものは深い悔恨だけだ。源氏も、今こそ本能のままにふるまっても、いつの日かまた得られるはずもない二人の間を思つて泣かずにいられない。これは悲しい運命の恋だ。しかも運命はこの悲しみだけではすまされなかつた。やがて藤壺の懐妊のことが

知らされ、誰が知らなくても、お互いだけは知っているその罪に、二人は限りなく懊悩し、心から喜ばれる帝の前に戦慄した。その苦しみの中に、源氏は藤壺にそっくりのあの北山の姫君を見つけたというわけです。あのあと、祖母の尼君がなくなり、よるべない身となった姫君は父宮の本邸にひきとられるところだったが、源氏はその一歩手前に尼君の邸をおとずれてつれて来てしまった。源氏は姫君を大切に養育し、姫君も源氏を真実の兄以上に親しみながら、美しく成人してゆく。この姫君が後の紫の上です。（以上「若紫」の巻）

さてこのあたりに末摘花のエピソードがはいります。夕顔のことが忘れられず、誰かその代わりになるような人は、と思っていた矢さき、なくなつた常陸の宮の姫君で、荒れはてた大きな邸にさびしく住んでいる、しかもその姫君は大へん琴がうまいという。源氏は

さつそく、その姫君の侍女である命婦に頼んで、邸に忍びこみ、琴を立ちぎきしたり、頭中将と競争で求愛の手紙を出したりして、結局、姫君に近づくことができた。しかしこの姫君は極端に内気で口が重い。源氏があらゆる言葉をつくして、言い寄ってもいつかな返事をしない。返歌をしたのは、そばにいてたまりかねた侍女の一人という始末。雪のふる寒い晩でしたが、源氏は侍女達が不如意な生活をかこっている所をたずねて、姫君と一夜を明かした。翌朝、白々と積った雪の光に、はじめてはつきりと姫君の顔をみた。胴長な恰好にまずあきれたところへ、さらに驚いたのは鼻だ。普賢菩薩の乗物の象のように、高くて長い上に、先の方が少したれて蓮華のように赤い。色はまっ青で、その顔の長いことはまるで馬だ。やせこけて、かかしに着物をきせたようなのには、源氏もおどろいた。しかしこの姫君は、どんな美人でも持っていないような美しい髪と、ひたむきな純情を持っている。こういう女人を架構したのは作者の

人間愛の力でしよう。(以上「末摘花」の巻)

十月十日過ぎ、桐壺の帝は先帝の御賀のために朱雀院に行幸されたが、その前、とくに懐妊中の藤壺のために内裏で舞楽の予行を催された。源氏が紅葉をかざして舞った青海波は、帝をはじめとして並みいる人々を感動させたが、それを見る藤壺の心はさびしい。御産は少しのびて、翌年二月十日すぎ、男の皇子が誕生された。皇子は源氏に生き写しだった。帝が大そうお喜びになるにつけ、藤壺も源氏も、良心の苛責に日夜苦しんだ。(以上「紅葉賀」の巻)

翌年二月二十日すぎ、南殿で花の宴が催され、春鶯囀を舞って賞讃をはくした源氏は、春の朧月が花の香を誘う夜の酔心地に、はからずも若く美しい一人の女と知り合った。あわただしい春の一夜で、名を明かし合うひまもなく、わずかに扇だけをとりにかわして別れた。

このことは、やがて源氏の運命に不幸をもたらす原因となった。三月末の、右大臣家の藤の花の宴で、源氏はこの女性に再会した。それは右大臣の六番目の姫君で、例の弘徽殿の女御の妹であった。右大臣は、源氏の舅にあたる左大臣と勢力上対立する間柄だし、源氏としてはまことに困った相手であった。しかも、この姫君は、近く東宮へ尚侍として上ることになっている。二人の恋愛は、東宮への反逆であると同時に、娘の出世によって一家の繁栄を願う父右大臣への反逆でもあるわけです。やがて桐壺の帝は讓位される。外戚の右大臣や弘徽殿女御が権勢をもっぱらにするようになる。そうした環境の中に、この頃の源氏は何かいらいらと煩悶をつづけ、次第に運命の陥穽におちてゆく、そんな感じがします。そうした苦しみも結局、藤壺との関係についての悩み、しかも抑えがたい思慕の情

——だったのですが。（以上「花宴」の巻）

桐壺帝の御讓位とともに新しく齋宮に立たれたのは、六条御息所と前東宮との間に生れた姫君です。また、賀茂の齋院にも新しい方が立って、四月にはその禊の式が盛大に行われ、源氏もその行列に加わることになる。折から懐妊中の葵の上は、人々にすすめられて無理に出かけたところが、その盛大な車の一行が、一条大路の雑沓もかまわず、権勢に物を言わせて、他の車を押しよけるうち、一つだけ頑として応じない車がある。それは六条御息所の車だった。葵の上と御息所とは、源氏をはさんでの、いわば競争者だし、またどちらにも高貴の身分で気位も高い。従者たちも、酔っていたし、内心敵意をもっていたので、大変な喧嘩になった。結局、御息所の方が負かされた。胸にすえかねた御息所の怨恨は生霊と化し、懐妊の葵の上につきまとしてさんざんに苦しめる。葵の上はやつと夕霧をうんだが、やはり生霊にたたられて、二十六歳の若さでなくなってしまう。生前愛することの浅かった妻のために、源氏もしみじみと涙を

流す。二条院に留守をしていた姫君と源氏が結婚したのはその後のことです。（以上「葵」の巻）

六条御息所は、源氏をあきらめて、齋宮とともに伊勢に下る決心をする。源氏はいまさらに名残が惜しまれ、九月のはじめ御息所を野の宮におとずれる。あきらめたはずの心があやしく乱れる。しかしいったん決心した上はとやはり伊勢に下る。そのお別れの式が宮中で行われたが、若い帝―後の朱雀院はその時の若い齋宮の姿を深く脳裡に刻みつけ、生涯その面影を胸に秘めてゆかれる。

冬になって桐壺帝の御悩は重く、ついに崩御された。藤壺は三条の里邸に移られる。源氏は、ある日宮をおとずれ、しいて逢おうとしたが、藤壺は驚きのあまり卒倒し、回復の後も、再び源氏に会おうとはしない。桐壺帝の御一周忌の後、藤壺は法華八講を催し、最後の日に突如髪を下して出家してしまわれた。多くの人々は慟哭し

た。藤壺の出家は桐壺帝への贖罪のためである。しかし、同じ罪を犯した自分は、何によつてあがなえばよいのか——源氏の懊惱は時にはげしい焦慮となり、自棄となり、反撥となつて燃えた。尚侍として入内した朧月夜が病気のため里へ下つていと知り、所もあるうに右大臣の邸へ、人目を忍んで通つたのも、その焦慮と反撥のあらわれであつた。そしてついにこの危険な行為は、ある雷雨の朝、右大臣に発見され、弘徽殿の女御に告げられて、源氏はその失脚を待ち望む一派の思うつぼに、やすやすとおちこむ形となつていったのです。（以上「賢木」の巻）

同じ夏、源氏は麗景殿の女御の妹の三の君を訪れ、ほととぎすの声をめでたりする。翌年になるといよいよ須磨へ引退することを決意した。右大臣家の策謀に先んじて善処したわけだが、実は源氏の良心が、自らの運命に加えた贖罪の鞭でもあつたのです。左大臣を

たずねて夕霧のことを依頼し、花散里にわかれを告げ、朧月夜にも無理をして手紙を出し、最後に藤壺をおとずれて決意をのべ、桐壺の院の山陵に詣でて夜もすがら、月光にぬれながら苦衷を訴えた源氏は、最愛の紫の上までも都に残し、わずかの従者をつれて須磨におもむくことになった。わびしい浦べの生活に、都の人々と便りをおかす中にも、藤壺に贈った歌などは、この時の源氏の敬虔な気持ちをよく物語っています。（以上「花散里」「須磨」の巻）

須磨に移ってから約一年の後、三月上旬巳の日に、開運の祓のため海岸に出ていた時、突如大暴風がおこり、すさまじい高潮が襲ってきた。一行は命からがら屋敷へ逃げ帰った。その夜、源氏の夢に故院の霊が現れ、住吉の神の導きに従って早くこの浦を去れと仰せになる。翌日、これも住吉の神のお告げと称して、明石入道が迎えに来た。源氏は早速明石へ移る。入道は豪華な邸宅を営み、住吉明神

を信仰して、一人娘の出世をたのしみに暮らしている。入道は、源氏こそその神慮にそう婿がねに相違ないと、しきりに娘の話をして源氏の心をひく。しかし娘は聡明で、身分の相違や源氏の境遇を考え、容易に父の言葉に従おうとはしない。そのうちに明石の浦にも秋がきた。八月十三日夜、月の美しい夕べ、源氏は入道の心こめたはからいで娘の住まいを訪れ、深い契りを結んだ。これが明石の上です。この人が懐妊したと思う頃、源氏に対して俄かに召還の宣旨が下った。それは帝が先帝の御遺志を気にされ、弘徽殿太后の反対をおし切って断行されたことだったが、明石の一家は、源氏の帰京を喜びながらもまた悲歎にくれる。

源氏が都に帰ると、一門には再び春がおとずれる。朱雀院は御悩のために、十一歳の東宮に讓位されたが、摂政には、先に左大臣をやめていた、葵の上の父がなった。多忙な明け暮れの中にも、源氏は明石の上を忘れず、女の子が生まれたときくと、早速乳母を選んで

つかわしたりする。紫の上にも誤解のないうちにと、このことをうちあげた。源氏が留守の間に味わった悲しみを思い出すと、紫の上は源氏の行為を恨まずにいられない。明石の上が琴がうまいときいでも、嫉妬を感じる。それを源氏はかえってかわいいと思う。(以上「明石」の巻)

その年の秋、源氏は住吉神社にお礼詣でをする。偶然明石の上も、父の入道にともなわれて参詣し、花やかな源氏の行列を見たが、わが身のみすぼらしさが卑下されて、いたたまれず、そつと難波の浦に漕ぎ返す。女性の心理というものでありましよう。源氏はそれを知って心から不憫に思う。

さて新帝の代となって、伊勢の斎宮も母の御息所とともに都に帰って来たが、御息所はまもなく重い病気にかかって、姫君のことをくれぐれも源氏に託して亡くなる。源氏はこの姫君に心ひかれるが、

御息所の遺言を重んじて養女としてひきとり、朱雀院の懇望もしりぞけて、新帝の女御とすることにきめる。（以上「潯標」の巻）

ところであの末摘花のことですが、源氏が須磨へ引退したために、この姫君は困窮のどん底におちいつてしまう。心のいやしい叔母は、彼女を娘の召使にしようとする。姫君はあらゆる困苦と誘惑にたえて父母のかたみの家を守り、源氏のおとずれを待っていた。はたして源氏はたずねてきた。不幸な生活の中にこれ程まで自分を信じてくれた、心高い姫君の純情に、源氏は深く打たれ、ねんごろに慰める。そしてこの不幸な女の生涯を守ろうと心にちかう。（以上「蓬生」の巻）

秋もおわりの九月晦日、源氏は石山に詣でようとして関山にさしかかった。折しも任が満ちて帰京する常陸介（もとの伊予介）の一

行にゆきあつた。それと知つた源氏は、空蟬のことを思い出してさつそく手紙をやつた。空蟬も感慨無量ですぐ歌をよんだが、人目のはばかられて、源氏に伝えるすべもない。その後、空蟬は夫に死別し、つくしてくれる人といつては、継子の河内守（もとの紀伊守）だが、それも自分に思いをかけてのことと知ると、世のあさましさが思われて、人知れず尼になつてしまふ。（以上「関屋」の巻）

年月は過ぎて、源氏はもう三十一歳です。前斎宮はめでたく入内して梅壺の女御とよばれる。もとの頭中将、今は権中納言となつてゐる人の姫君の、弘徽殿の女御をこえて帝の御寵愛を得る。両方の女房たちが絵合の会を開く。藤壺の宮が判者となり、双方からつぎつぎと由緒ある絵がとり出されて、容易に勝負が決しない。そこへ、最後に源氏が須磨でかいた絵日記が出て、勝は梅壺方に決する。

（以上「絵合」の巻）

源氏は何とかして明石の上と姫君を都に呼びたいと思うのだが、思慮深い明石の上は、いろいろと将来のことを考慮して容易に決心しない。それでもやっと入道のすすめで、母君と姫君と三人、大堰の山荘に移り住むことになった。源氏は嵯峨野の御堂に参詣することを口実に、明石の上をおとずれ、固く将来をちぎったのだが、その後、紫の上にもこのことをうち明け、姫君を二条院にひきとることを相談する。（以上「松風」の巻）

冬が来て大堰の山荘はひとしおさびしい。源氏はしきりに二条院に移るようにすすめるが、明石の上はどうしても従わない。結局、姫君だけが引き取られることになる。それら母としての明石の上にとって、何ものにもかえがたいさびしさであるが、姫君の長い将来を思えば、それも我慢しなければならぬ。忍従だけが真実の幸福を

かちえる——明石の上はそうした人生観にわれとわが身をおさえて、愛する姫君を源氏夫妻に手渡す。姫君は次第に紫の上になつてゆく。紫の上はそのかわいさゆえに、競争者である明石の上を許す気持になつてゆく。このあたり女性心理の微妙さを克明に描いている。

その翌年、春の末、藤壺の宮が病氣になり、次第に重くなられて来た。源氏が驚いてお見舞いに参上すると、二言三言、言葉をおかわすうちに、まるでともし火でも消えるように、はかなくなつてしまわれた。まだ三十七歳という盛りの年であつた。宿命の重荷を負つて、ひとりさびしく逝かれた宮を思い、源氏は念誦堂にこもつてひねもす泣きくらしした。源氏にとって、藤壺はいわば永遠の女性であつたのですから。

その後のある夜、帝は夜居の僧から、実の父君が源氏であることを聞かれ、ひどく煩悶されて源氏に御讓位の意思をほのめかされた。源氏は恐懼してその非をおいさめし、太政大臣の榮譽も拝辞して、

ひたすら隠退を願うようになった。藤壺の死がどれほど源氏の心に衝撃をあたえたか考えていた。 (以上「薄雲」の巻)

その頃、朝顔の姫君は齋院をやめてなき父宮の桃園の邸に帰っていた。藤壺の死にあうにつけ、十数年の昔、同じ宮中で、求愛の手紙など書いた朝顔のことがたまらなくなつて、源氏はしばしばその邸をおとずれてくどいた。しかし志操堅固な朝顔は、決して動こうとしない。失望のあまり、理性を失つたような源氏の行動を、紫の上は嫉妬と悲しさで、一つになつた気持で眺める。氷のように冷い月が、降り積つた雪を照らす夜、源氏はそれとなく紫の上に亡き藤壺のことを語り、その横顔に亡き人の面影をしのぶ。そしてその夜の夢にあらわれた藤壺の姿に源氏は嗚咽するのであった。 (以上「朝顔」の巻)

以上だいたい桐壺の巻から朝顔の巻までで、藤壺の物語を骨子とする部分が終わります。これが第一部の前半で、藤壺と源氏の運命的な恋愛を中心とし、これに、紫の上と明石の上の物語をからみ合わせたものです。このあとになると、藤壺という人物は事実上登場しない。しかしその物語は、作者の慎重な用意によって、やがて第二部になると、形をかえてあらわれてくる。そこをよく覚えておいてください。

次は第一部の後半です。これは「少女」の巻にはじまる雲井の雁の物語と、「玉鬘」の巻にはじまる玉鬘の物語とが二つの流れを引いて、前半にひきつづく紫の上と明石の上の物語に、からみ合いつつ進行してゆくのです。まず雲井の雁の物語は、源氏の子息の夕霧が、父の深い考慮から、元服の後も六位にとどまり、厳格な指導のもとに学問に専念し、ついに大学の困難な試験にパスする話からはじまります。雲井の雁は夕霧の従姉にあたり、夕霧の母葵の上の兄、

昔の頭中将、これが現在彼女の父の内大臣というわけです。二人は幼い時から祖母の大宮のもとで養われ、それがいつか相愛の間柄、ということになったのだが、姉姫君の弘徽殿の女御が競争者の梅壺の女御に中宮の地位を先んじられたので、内大臣は源氏に対して不快で仕方がない。今度こそはと期待していた雲井の雁が、またまた夕霧という小冠者にしてやられたと思うと、癪にさわってたまらない。二人の間をさいて、面会も許さないようにしてしまった。しかし夕霧は我慢してよく勉強した。そしてめでたく進士にも及第し、やがて五位に昇進した。(以上「少女」の巻)

一方玉鬘の物語は、十七、八年も昔のことにさかのぼり、源氏の脳裡から今も去らないあの夕顔の思い出にはじまります。玉鬘はつまり夕顔と頭中将との間に生れた娘なのだが、母の行くえが知れないままに、乳母にともなわれて、その夫の任国である筑紫へはるば

る下った。玉鬘が十歳の時、乳母の夫は子供たちに姫君のことをくれぐれも頼んで死んだが、遺族は急に上京することもできないままに、玉鬘は二十歳にもなる。美貌の評判をきいて、肥後の国に威勢をふるう大夫の監という者がなかば脅迫的に求婚してきた。乳母の息子のうち二人は監についてしまったが、長兄の豊後介は父の遺言を守り、妻子も捨てて母とともに玉鬘をつれて筑紫を脱出し、命からがら都へ上った。こういう時こそと、長谷の観音へ詣でたところ、椿市の宿で偶然にもめぐり合ったのが、昔の右近だった。右近はさつそくこれを源氏に話す。源氏は紫の上と相談して玉鬘を新邸の六条院にひきとる。そして昔から母性型で世話好きな花散里にあずける。六条院は、方四町をしめた壮麗な大邸宅で、源氏は紫の上とともに春の景色を主にした殿舎に住み、花散里は夏の景色、秋好中宮は秋の景色、明石の上は冬の景色を、それぞれ主にした殿舎に移り住んだ、という、まことに豪華な話です。このほか二条院の東院に

は、末摘花や空蟬が迎えられて命生を安らかに送っている。源氏はその年の暮、ゆかりある女性たちに、それぞれにふさわしい新年の晴着をおくる。紫の上はそれに目を通しながら、贈られる女性たちの容貌や人柄を想像する。そして明石の上だけは油断のならない競争者だと思つて心配する。（以上「玉鬘」の巻）

年が明けると、源氏はこうした女性たちをつぎつぎ訪問し、いつのまにか八歳になった明石の姫君に、手をとつて、生母の明石の上あての返歌を書かせたりする。明石の上はやはり誰より源氏の心にかなうのか、元日そうそう紫の上の嫉妬を気にしながらも、源氏はそこにとまる。（以上「初音」の巻）

そのうち玉鬘の美しさが評判になりはじめた。ほうぼうから集る求愛の手紙を、源氏は時々やつて来ては開けてみる。男たちの批評

をしたり、それに対する心得を言つてきかせたりする。源氏自身もまた、玉鬘に対する恋情をどうすることもできず、どうかした折には、紫の上に気をまわされなどする。初夏の頃、ほのかな月の光の中に源氏は玉鬘によりそつて、何かと、心の中を訴える。が、また理性をもつて自制する。青年の頃のような行いはもうできない。それは彼としてもさびしいことであつたでしょう。(以上「胡蝶」の巻)

こうして源氏はひまさえあれば玉鬘をおとずれ、あるいは、五月雨の夜に兵部卿の宮を招いて、宮が几帳の向こうでせつない胸中を訴えているときに、前から用意していた沢山の螢を放ち、青い光の中に玉鬘の姿を照し出して、宮の心を悩殺させたり、あるいは玉鬘が絵物語を読んでいるところに来て、物語論に時をうつしたりする。

(以上「螢」の巻)

暑い夏の日の夕べには、篝火をたかせて和琴を弾じ、玉鬘がその妙音に感じ入ってしまったうと、あなたの父君の内大臣はもつと名手ですよ、と話す。ところで、その内大臣は、源氏が玉鬘をさがし出したことに挑戦でもするようになり、ふれまで出して一人の娘をさがしてくる。近江の君とよばれ、無邪気な娘だが、どうも品がない。口早で、滔々とまくしたてては、父大臣はじめ一同を笑わせたり呆れさせたりしている。(以上「常夏」「篝火」の巻)

「初音」の巻からあと、胡蝶、螢、常夏、篝火、野分と、これは皆、源氏が三十六歳のときのことですが、春から秋へかけての季節の情趣が、非常によく書かれている。このあと「藤裏葉」の巻にかけて四年間ばかりは、六条院の栄華の時代で、源氏としてはもつとも多幸な時期なのですが、それが養女の玉鬘や実子の夕霧を中心と

して、源氏の次のジェネレーションを扱っているのは、物語の進展として注意に値するといえましょう。いわば、源氏や内大臣の世代と、夕霧や雲井の雁、玉鬘、こういう人々の世代とが、勢力相桔抗して進むがたです。それが次の第二部、若菜以後になると、古い時代は完全に若い世代に制圧される、全く面白い。

さて、野分がひどく吹き荒れた朝、夕霧は六条院へ見舞いに上つて、妻戸のすき間から世にもあでやかな紫の上の姿を見る。夕霧という人はごく真面目な男で、雲井の雁以外の女性に心を動かしたことなどほとんどない。その夕霧が、しかも父の妻である紫の上に恍惚となる。それを野分の背景において書くのだから、父の源氏がはらはらする以上に読者は胸をとどろかせるでしょう。少し気の早い読者なら、藤壺と源氏との関係のような事件が起こるのではないかと——しかし、それではあまり曲がない。作者ははらはらさせてだ

けおいて、あとはすうつと幕を下ろしてしまふ。その後、夕霧が紫の上を見ることができたのは、紫の上が死んでからのことでした。

この同じ野分の日夕霧は、父の源氏が玉鬘になれ親しんでいる場面をみて不審を抱く。そして急に自分も雲井の雁への恋しさがこみ上げてくる。(以上「野分」の巻)

その年の十二月、大原野に行幸があつて、玉鬘ははじめて実の父の内大臣を見ることができた。行列の中には、求婚者の一人である髭黒の大將もいたが、玉鬘は色黒で髭の多いこの人を大いに軽蔑する。源氏は玉鬘を尚侍として入内させるつもりで、翌春そうそう裳着の式をとり行い、その式場で正式に内大臣と父子の対面をさせた。二十年の悲恋を思い、目の前に美しく成人したわが子を見て、内大臣は、源氏が長い間秘密にしていた不信な行為もせめず、また雲井の雁のことなどについてわだかまっていた感情もいっさい水に流し

て、ただほろほろと泣いた。（以上「行幸」の巻）

玉鬘はこうして忽ち内大臣の娘となり、これに求婚した内大臣の子の柏木を唾然とさせたり、兄妹のつもりですましていた夕霧をくやしがらせたりする。源氏は自分の都合も考えて、玉鬘を尚侍にしたいと思うのですが、玉鬘自身は、秋好中宮や弘徽殿の女御のことを考えて気が進まない。といって幾人かある求婚者に対しても、別に気が向くわけではなく、髭黒などには一筆の返事も出さない。

（以上「藤袴」の巻）

その髭黒が、お歴々を尻目に、堂々と玉鬘を手に入れてしまったのだから大変です。帝の失望、源氏の落胆、兵部卿の宮その他求婚者の驚愕。ほっとしたのは父の内大臣だけで、当の玉鬘さえ不満なのです。それだけに髭黒の得意は大したものです。しげしげと玉鬘

のもとに通い、源氏が参内の支度をすることを不安がって、一日も早く自邸に迎えたいと用意する。この髭黒の北の方というのは、紫の上とは腹ちがいの姉にあたる人で、長い間物の怪をわずらったため、すっかり老いぼけて見る影もなく、いったん発作を起こしたら前後不覚に狂乱してしまふ、厄介な人だった。その北の方が、ある雪の夕べ、髭黒が玉鬘のもとへ出かけようと、鼻唄でもうたいながら盛装をこらしているところへ、いきなり立ち上って、さつとばかり火取の灰を浴びせかけたものです。事件をきいて、北の方の父の式部卿の宮は、髭黒の不行跡に腹を立て、三人の子供ごと北の方を本邸にひきとってしまった。その三人の子の中に、十二歳になる姫君がいたが、父の家を去るのがかなしくて、「真木の柱はわれを忘るな」という可憐な歌を残す。大変な家庭争議です。玉鬘はやはり周囲の事情からやがて入内するのですが、髭黒はやはり何かと心配で、結局、自邸に迎えとってしまい、まもなく男の子が生れたりして、玉

鬘はその後は大ぜいの子の良いお母さんになってしまふ。どうも、この作者は時々こんなことをして読者を煙にまく。（以上「真木柱」の巻）

紫の上に養育された明石の姫君は、十一歳になったので秋好中宮の御殿で盛大に裳着の式を行い、いよいよ四月に入内ときまる。その調度品のためには、源氏は古今の名筆を蒐集し、兵部卿の宮と書道論を展開したりして賑かな明けくれです。こういうことにつけても、内大臣は雲井の雁のことが苦になるのですが、夕霧は内大臣をうらんでも雲井の雁のことは忘れない。父の源氏が早く結婚するようにすすめても、他の女に心に移しなど決してすまいと思う。（以上「梅枝」の巻）

しかし、夕霧と内大臣との確執も、やがて解ける時が来た。祖母

の大宮の命日に、法会に列した夕霧に向かつて、内大臣はなつかしげな言葉をかけ、四月の藤の花の宴には、わざわざ迎えをよこして彼を招いた。雲井の雁との結婚が許され、二人の多年の恋は、ここにめでたく成就したというわけです。

その二十日すぎには、いよいよ明石の姫君の入内です。参内の時は紫の上がつきそい、その後のお世話は、紫の上のはからいで、生母の明石の上がすることになった。そして、紫の上と明石の上とはその夜はじめて対面し、お互いに相手を尊敬する。忍従の八年間をたえて、今こそ栄光につつまれた姫君につきそう明石の上は、作者自身の憧憬をそのまま象徴化したものです。

その秋、源氏は太上天皇に准ぜられ、十二月には帝と朱雀院とがおそろいで六条院に行幸され、一代の盛儀は世の耳目をおどろかせた。こうして「藤裏葉」の巻は、今まで懸案だったすべての事がらを、ハッピー・エンドとして一挙に解決し、ここで第一部の絢爛た

る物語が、終わりを告げることになるわけです。（以上「藤裏葉」の巻）

第二部は「若菜」の上の巻にはじまります。まず主流となる女三の宮の物語をとらえてゆきましょう。女三の宮は朱雀院の姫君で、その母君は、亡き藤壺の宮の妹でした。つまり藤壺の姪にあたるということに注意してください。母君は早く亡くなったのですが、朱雀院は何とかして早くこの姫宮の縁を定め、その後に安らかに宿望の出家をはたしたいと望まれるのですが、候補者は大勢あっても、みな何かしら欠点があつてなかなかきまらない。結局、東宮の意見などもあつて、源氏が最適任であろうということになった。源氏にはむろん紫の上という人がおりますが、これは正式の表立った夫人とはいえない。いわば内妻という具合でしたから。そのうち朱雀院はどうとう出家してしまわれる。痛々しいお姿でくれぐれも姫宮の

ことをお頼みになるので、源氏もお引き受けしないわけにゆかない。紫の上には何として説明しようかと惑うが、なき藤壺の姪と思えば、何となく心もひかれる。結局、翌年の春、源氏は四十の賀のあとで、女三の宮を六条院に迎えることとなったのです。まだ十四、五歳のいたいけな花嫁、しかし紫の上にとつては、かつてのどの女性の場合より致命的な強敵です。明石の姫君が懐妊のために六条院にさがつて来られた時、紫の上ははじめて女三の宮にも対面し、子供っぽい宮にむしろ同情を感じたのですが、しかし彼女の不安はそんなことで消えるものではない。

明石の姫君は翌年の春、男の皇子をお生みになった。明石の入道の宿願はここにめでたく実を結んだわけです。入道は長い手紙を明石の上によこし、住吉の神の神慮をといて姫君の将来を祝福し、自分分は深山に隠栖することをのべてよこしました。

さて女三の宮が源氏に降嫁する前、熱心な求婚者だった一人に、

内大臣の子息の柏木がおりました。彼はその後も女三の宮があきらめきれず、三月のうらかな日、六条院で蹴まりの会が催された時も、宮の部屋のあたりをぼんやり眺めていたところ、猫のいたずらで御簾が引き上げられ、偶然にも女三の宮のあでやかな姿を見てしまったのです。（以上「若菜」上の巻）

それ以来柏木は病気のようになってしまう、やっとあの猫を借りうけてわずかに悶々の情をまぎらわせていました。

それから四、五年たって、冷泉帝は東宮に讓位され、新しい東宮には明石の姫君の皇子が立たれた。源氏は住吉に詣でて明石の入道の立てた願のお礼を果たす。朱雀院の五十の賀の折には、その前に女楽を催して、明石の姫君、女三の宮、紫の上、明石の上などがそれぞれ得意の楽器を弹奏した。後で思えば、それが六条院最後の豪華な団欒の夕べだったのです。というのは、そのすぐ翌日、紫の上

が突然発病し、女三の宮のもとからかけつけた源氏が、とるものもとりにあえず介抱したが、病気はよくなならないままに月を越してしまつた。やがて紫の上は静養のため二条院にうつり、源氏もむろんその介抱にあけてくれて、六条院はがら明きになつてしまふ。そのすきをうかがつて、柏木はとうとう女三の宮のもとへ忍びこんだ。罪の意識に苦しみながらも、数年間たえて来た彼の激情は爆発せずにはいなかつた。

しかし、その結果は——女三の宮の懐妊。不審に思つていた源氏は、あるとき宮の夜具の下から発見した柏木の手紙で、すべての秘密を知る。狼狽と怒り、そしてその底から、泉のようにわき上る良心。源氏はかつて自分か犯した恐しい罪をかえりみた。懊惱の中に尼となつて死んでゆかれた藤壺のかなしい瞳を——。源氏は宿業の深さに戦慄し、宮も柏木も正面から責めることはできなかつたのです。（以上「若菜」下の巻）

柏木は宮への思慕と源氏への苦悩からついに病氣となった。宮はやがて男の子が生まれたが、源氏は日夜うつうつとして楽しめない。宮も懊悩の末、父君朱雀院に歎願して、とうとう尼になってしまわれる。柏木はそれをきくといよいよ衰弱し、親友の夕霧に妻の落葉の宮のことを頼み、それとなく源氏へのとりなしを依頼して、泡が消えるように死んでいった。（以上「柏木」の巻）

女三の宮の生んだ若君は柏木によく似て、日ましに成人する。尼すがたの女三の宮と、ともにそれをみながら、源氏の心にもいつかしみじみとあたたかい情がわいてくる。

ところで柏木から落葉の宮のことを頼まれた夕霧は、実直な性質ですから、たびたび宮を見舞っているうち、いつとなくその人に恋を感じるようになった。宮の母君が柏木の愛用した横笛を彼に贈つ

ても、夕霧がなき友を思う情はそのまま落葉の宮を慕う情となり、やがてそれが妻の雲井の雁を嫉妬させて、一騒動おこすことになったりする。（以上「横笛」の巻）

夏の頃、蓮の花の盛りに、女三の宮の持仏供養が行われ、秋になると、その庭に鈴虫が放されてしめやかな宴がはられたりした。この世の罪をこえて、女三の宮の前には、しずかな、清らかな世界が開けてきたのでしよう。（以上「鈴虫」の巻）

いっぽうあの夕霧は、小野に移った落葉の宮をその後もしばしば訪れて求愛したが、宮の心は少しもゆるがず、母君の死後、一条の旧邸に戻った後も絶対に許そうとはしない。ところが雲井の雁の嫉妬は大変で、とうとう子供たちをつれて父の邸へ帰ってしまう。夕

霧は狼狽して迎えに行つたが、わがままで気位の高い彼女はその場を動こうともしない。そうしているうちに落葉の宮は結局、夕霧に負けてしまう。(以上「夕霧」の巻)

紫の上は前の年の重病以来、ずっと具合わるく日ましに衰弱するので、出家させてほしいと望む。源氏はそれだけはどうしても許す気になれない。春のなかばのうらかな日、二条院で、法華経千部の供養が行われ、帝、中宮をはじめとしてほうぼうから盛んな贈り物があつて、夜もすがら賑かな会が続いたが、これも永久の別れになるかと思うと、悲しい。衰弱は夏になるといよいよ加わり、明石の中宮の皇子たちを見ても感傷的になる。初夏の風が草の葉をわたるしめやかな夕べ、彼女は中宮に手をとられたまま、夜通しの介抱もかいたくその明け方むなしくなつてしまつた。源氏は悲歎の中に、せめてもと夕霧をよんで受戒の用意をさせる。夕霧は野分のあの日

以来はじめて見る紫の上の顔を、薄暗い夜明けの光の中に、ともし火をかかげてじつと見つめる。表情のない、かなしい白い顔である。
(以上「御法」の巻)

紫の上は四十三年の生涯をさびしく終えた。多くの人々に羨望された貴女の生涯はこういうものであった。源氏にとって生涯の伴侶だったこの人の死は、同時に源氏自身の生の喪失でもある。春の光を仰いでも心は暗く、夏をすごし秋を送っても、見るもの聞くものにつけ、ただ故人だけがしのばれる。五節もすぎ、その年も暮になる。源氏はいよいよ出家の決意を固め、昔の手紙など整理した。その中にとくに一まとめにしてあった紫の上の手紙は読み返すにつけても悲しく、ついにみな焼かせてしまった。年の最後の夜はお仏名の錫杖の声も、例年とはちがって身にしみ、わが世もこれで終わつたとおもう。(以上「幻」の巻)

以上が第二部の概要です。第一部とちがつて、ここは病氣や、死などの人間苦が、次々と物語られている。そこに流れているものは孤愁である。とくに注意しなければならないのは、女三の宮の柏木との事件が、源氏と藤壺との秘密に対する宿命の線上に扱われていることで、これは源氏物語全体としても重要な問題です。

最後に第三部にまいりましょう。「匂宮」の巻から「夢浮橋」の巻までを指しますが、ここは源氏がなくなつてから後のことが語られている。源氏がいつなくなつたかは、はっきり示してありませんが、紫の上の死後数年の間でしょう。「幻」の巻のあとに「雲隠」という巻がある。それには何も書いてないが、源氏の死を意味していることだけはたしかです。源氏のなくなつたあと、それに立ちつづくほどの人は一門の中にも見出されなかつた。ただ孫にあたる匂宮——明石の中宮の生まれた第三皇子、と、女三の宮の若君の薫

の君と、この二人がすぐれた人として評判された。薫は冷泉院や秋好中宮に特別愛され、母の女三の宮からは、たった一人の頼り所にされている。真面目な性格の持ち主で、幼い頃から何となく自分の身の上に不審を抱き、成人して出世などしても、世間的なものには気が向かない。玉鬘にかわいがられて、一番姉の姫君に心を寄せたこともあるが、冷泉院に上ってしまったからは、その楽しみもなくなった。生れつき上品な香がそなわっていて、それが友人の匂宮を刺激する。宮も盛に香をたきしめて競争するが、薫の実直さにくらべると、華美で色好みの点が強い。この二人の貴公子を目標にして、夕霧や按察大納言や玉鬘や真木柱などが、それぞれの娘たちを大切にかしずいている。社交界は、また新しい世代を展開する。夕霧といえは、あの家庭紛争のあと落葉の宮を六条院に迎えて、三条の邸の雲井の雁と月の半分ずつ通い、双方円満におさまっている。ところで、その子供たちが、いつかそれぞれ恋愛などする年ごろになっ

て、親たちもぼんやりしてはいられない、そんな時代になっているのです。大体、そんなことを予備知識にして、第三部の本体である、宇治十帖の筋をきいて下さい。（以上「匂宮」「紅梅」「竹河」の巻）

薫はこの世をはかないものに思い、何とかして悟りをえたいと考えていたが、ふとした縁で、宇治に行いすまされるハの宮のもとに、親しく通うようになった。ハの宮は源氏の異母弟にあたる方ですが、二人の姫君をのこして北の方が他界したあと、お邸が焼けるなど不幸つづきで、きびしい宇治の山荘に移られ、そこに住む阿闍梨を導師として、信仰生活を送っておられたのです。薫はこの宮のもとに三年ばかり通ううち、ふとした機会に美しい二人の姫君を垣間見たのですが、そのことを聞き知った匂宮は、俄然薫以上に熱心になつてしまふ。薫は、姫君たちの老女の弁の君から、はからずも聞いた

自分の出生の秘密に、うつうつとして楽しめず、八の宮から話された姫君たちのことさえ、浮気めいた心では考えることができなかつた。こうして、運命の重荷を負って生れた薫の、わびしい人生が、匂宮のそれとは対照的な人生として描かれてゆく——ということになる。(以上「橋姫」の巻)

匂宮はそのうち早くも宇治の姫君たちに手紙を送り、一通りながら中の君の返事をもらいなどする。今後どこまで進むか分からない宮の熱心さである。大君が二十五、中の君が二十三の秋、八の宮はねんごろに姫君たちのことを薫に頼まれ、姫君たちにも後のことをよくよく言いおいて、寺にこもられたが、まもなく病にかかられ、姫君たちが介抱するひまもなくなってしまう。薫は心から悔みの手紙を書き、法要のことなどねんごろに指図すると、姫君の方からも心こめた返事が来る。その後もおりおり薫は宇治を見舞い、姫

君たちも心から薫をたよりに思うようになった。（以上「椎本」の巻）

さて薫は、匂宮が中の君にひかれていることを察して、そのことを姫君たちに伝え、自分は大君に対する愛をうちあけたのです。大君はわが身の薄命を深く思いつめ、すでに独身を決意し、薫の求愛を固くしりぞけた。ただその代わり、妹は薫のような人に預けたいと思つた。これはいかにも姉らしいやさしい考えでした。それがある晩のこと、風が荒く吹く中に、大君は妹と寝ている部屋に、ふと忍びこむ人のけはいを感じた。とつさに妹をのこして屏風のかげに隠れてしまった。薫は心ならずも中の君のかたわらに臥すが、まじめな彼はそれ以上どうすることもできない。その後、まもなく、彼は約束によつて匂宮を宇治に案内する。自分は大君の部屋に忍び、宮は中の君の方へと首尾をつくつた。大君は強硬にこぼんだが、中

の君はそれと気づかず、思いがけぬ人と契ってしまった。薫に対する友情と信頼から、愛する妹をすすめていた大君は、それがゆき違ってしまったことを心から歎いたが、今となってはどうにもならない。

匂宮は中の君が気に入り、中の君もまた匂宮を愛し、二人の結婚はいちおう成功したようにみえた。しかし匂宮は身分上軽々しい外出などはめったにできない。その上、夕霧の六の君との結婚をすすめられている。宇治への消息もゆつくり書けない。宇治ではそれを宮の心がわりと思う。大君はその心労がつもって病の床にふしてしまふ。看病に疲れた妹が、そばでうとうとと昼寝をしているのを見ても、妹思いの大君はほろほろと泣けてくる。目をさました中の君と、なき父宮の話などして手を取りあつて涙にくれる。

冬が深まるにつれ、大君の病気は重態におちいり、薫は公私一切の用事を捨ててその看護にあたった。死が近づいたころ、大君は瞳

をあげて薫を見つめ、妹をあなたにと思っていたのに、その本意がかなわず残念でございます、と一言いった。そうしてものが枯れてゆくように、はかなく死んでしまふ。薫は放心のまま、ともし火をかかげてなき人の顔をしみじみと見た。何という高く美しいその顔。髪をかきやると、生前のままのその人の香りがさつと流れる。外にはごうごうと川風が吹雪の中に鳴っている。ある夜、匂宮は吹雪を ついて、はるばる馬でたずねて来た。が、すぐには会う気もしない中の君の心であつた。

(以上「総角」の

巻)

宇治にもやがて春はめぐつて来た。山の阿闍梨からは真心こめた手紙にそえて、わらびやつくしを送ってきた。二月になると、中の君はいよいよ匂宮に迎えられることになり、薫の世話によつて、思い出深い宇治の山里を去つた。京都には果たしてどんな運

命が待っているか――。

二条院には梅の花が咲き、薫の心はひとしおさびしい。匂宮が中の君を大事にしていると聞けば、安心するいつぽうに、嫉ましい感じもする。思い立って中の君をおとずれ、その幸福を眼の前にみても、むやみになくなつた大君がしのばれて悲しい。（以上「早蕨」の巻）

夕霧の六の君は、結局匂宮と結婚することにきまつた。懐妊中の中の君は悲しく、兄のようにいたわる薫に向かつて、宇治へ帰りたいと訴えずにいられない。秋もなかば、匂宮はついに夕霧の邸に迎えられて、六の君と結婚した。中の君を心からあわれむようすもなく、ひたすら若い新妻にひかれているような宮の軽薄さ。その後、当然中の君にはわびしい夜がつづく。そのさびしさのあまり彼女は薫に手紙を書く。薫は妹に与えるようなまじめな返事を書いて、翌

日みずからたずねてゆく。二人は心の底からしみじみと語り合う。もしこの時、薫にもう少し勇気があつたら、どうにでもなれたのだが、彼の弱い内省的な性格がやはりそれを許さない。ところが匂宮はそうではない。その夜久しぶりに二条院に帰ってみると、中の君の衣に薫の香がしみついていと感じ、それを盾に二人の間を疑う。執拗に中の君を責める。自分の品行を尺度にして、薫もやはり自分と同じことをしていると疑う心なのでしよう。

中の君は薫を慕わしく思いながら、やはりこれ以上親しくしてはならないと、薫の関心を他へ移すつもりで、最近行方の分かった異母妹のことを話してみた。八の宮が北の方の死後間もなく、北の方の姪を愛して、その間にもうけられた娘で、母はその後、受領の妻になつたが、その姫君は非常に大君に似ているという、薫はその一ことに思わず心を動かす。

二月になつて中の君は男の子を安産した。その二十日すぎには帝

の女二の宮の裳着の式があげられ、その姫君には予定どおり薫が迎えられた。薫としては迷惑しごくです。彼は匂宮の留守をうかがつて中の君をたずね、なき大君を追憶しては涙ぐむ、薫はそういう青年だった。（以上「宿木」の巻）

四月の二十日すぎ、宇治をたずねた薫は、偶然にもいつか中の君が話した常陸の姫君を垣間見た。夢中になる程でもないうちに、その一家には縁談をめぐってごたごたが起こる。母の北の方は姫君を二条院の中の君に預けてしまう。その時、北の方は、匂宮の姿を物かげから見てすっかり感心し、女はやっぱり理想だけは高く持つべきだと考えている。そこへちようど、中の君の見舞いにかこつけてたずねて来た薫を見て、こんな方に娘を預けたらどんなに幸福だろうと思ひ、くれぐれも娘を中の君に頼んで帰って行つた。ところが、その日匂宮は邸に帰つてきて、この娘——浮舟を見つけてしまった。

それと知った母君は驚いて、すぐに浮舟を二条院からつれ出し、三条の小家に移した。

秋も深まった頃、薫は宇治へ行って舟の尼に会い、そのすすめで三条の家に浮舟をたずねた。ねんごろにその人と一夜を語り合い、翌日は山路の朝霧をおかして、宇治のすまいにつれ帰った。なき大君の身代わりにもと、薫はやさしく浮舟をなぐさめ、浮舟もまた薫によりかかる気持になっていった。（以上「東屋」の巻）

ところが、匂宮はあの時の女のこと忘れられない。中の君を責めて、いろいろ探りを入れるうち、とうとうその行方をつきとめた。そして薫が絶対に行く気づかいのない日をたしかめ、そつと宇治におもむいて、夜中近くその家をのぞいた。はたせるかな、あの女は、多くの女房たちに交って話をしている。やがて女たちはみな寝につ

く。匂宮は薫の風をよそおって侍女の右近に案内させ、浮舟に近づく。はじめは薫とばかり信じていた浮舟は、やがてあらぬ男と気づき、あさましさにあわて泣いたがどうにもならない。彼女はそうした運命をかなしみながらも、匂宮の積極的な熱情に強く心ひかれ、宮も理性をうしなうが、高貴な身分ではいつまでもそうしていることもできずに、泣きながら京へ帰る。

そんな秘密が彼らの間におかされたとは想像もしない薫は、ひまをみて宇治をたずねた。浮舟は秘密の発覚を恐れながらも、匂宮のことが忘れられず、まじめな薫の親切な言葉に、ただほろほろと泣いてしまう。

二月の十日頃、匂宮は雪をおかしてまた宇治をおとずれた。女を抱いて、かねて用意させておいた小舟に乗った。空には寒々と有明の月が氷っている。橘の小島にあそび、また川ぞいの小家に泊って一日を語りくらしした。

その後、浮舟のもとへは二人の男からほとんど同時に手紙が来た。その手紙には、どちらにも、浮舟を迎えるために、用意をいそいでいると書いてあった。進退きわまつた浮舟は、もう死ぬよりほかはない。外には宇治川の急流がごうごうと音をたてている。ある日薫の使者と匂宮との使者が、偶然宇治で出あうという事件が起こった。薫は匂宮の秘密を知ってしまう。彼は浮舟の不信をにくむが、またそんな男に弄ばれる浮舟の将来があわれまれ、女に忠告の手紙を出す。浮舟は胸もつぶれる思いで、死の決意をいつそう固くする。折しも匂宮からは、薫の嚴重な監視をくぐって、熱情をこめた手紙がとどいた。浮舟はそれを顔にあて、声を立てて泣いた。返事は書けない。匂宮は危険をおかしてみずから馬で宇治にやってくる。もちろん家に入ることはできない。浮舟は夜通し泣きあかす。夜が明けると経をよみ、親に先立つ罪をわび、又しても匂宮の情熱を思い出す。薫のこと、中の君のこと、いつもはうとうとしい兄弟のことま

で、走馬燈のように去来する。京から来た母の手紙には、この最愛の娘の無事がひたすら念じてある。（以上「浮舟」の巻）

その夜突然、浮舟は行方知れなくなった。母がすぐにかけていろいろ調べたが分からない。さては川に身を投げたのかと、身のまわりの調度など集めて、とりあえず火葬にした。ちようどその頃、薫は石山に参籠していたが、事件をきくと、何よりも自分のうかつさが悔まれ、いっぽう、病氣と称してこの事件には無関係な風をよそおう、誠意のない匂宮の態度が不愉快で、さっそく宇治におもむいて、侍女の右近をよび、今までの事情をのこらず白状させた。やはりそうだったかと思うにつけ、またしても自分を反省し、責められるのは、結局自分かもしれぬと考える彼であった。山の阿闍梨をよび、彼はねんごろに供養を営んだ。それにしても、大君といい、中の君といい、今またこの浮舟といい、薫と宇治の姫君たちとの間

に横たわるこのつらい宿命は、いったい何だというのでしょうか。

(以上「蜻蛉」の巻)

さて場面は一転する。横川に一人の高徳の僧がいました。八十ばかりの老尼の母が、五十ばかりの妹尼と長谷に詣でた帰り、突然病気になるたとの知らせで、急いで山を下り、宇治の院にかけつけたのだが、僧都の一行は荒廃した院の裏手で、白い怪しげな生き物を発見した。よく見るとそれは髪の毛の長い美しい女です。いったん死んだものがよみがえったらしい。変化のものかもしれないが、ともかく雨にうたせては不憫だろうと、院内の一間に入れておいたところ、妹尼がそれを見て、なくなった娘の生きかわりだと喜び、小野の庵室にもいっしょにつれて帰って、さまざま介抱する。しかし女ははかばかしくならない。わけをきいても、この世に生きてはいられない人間です。どうぞ川に落して死なせて下さいと頼む。妹尼の懇願

で、僧都が一心に加持をすると、やっと正気にかえつたが、しかし女——いうまでもなく浮舟なのだが——は、何ときかれても素性を語らない。ただ尼にして下さいと頼むだけだ。経をよみ手習をしなから、彼女は時々は昔のことを考える。しかしこれもこれも今となつてはみな遠い世界のこと、ただなつかしまれるは母と乳母のことだけです。

妹尼が他の尼や女房をつれて長谷詣に出かけたあと、浮舟はつづくくと自分の身をかえりみました。あさましい身を救ってくださるのは、ただみ仏の慈悲しかない。折から小野に立ちよつた僧都に、彼女は必死の思いで出家の導きを頼む。僧都是一応は意見もしてみたが、浮舟の決意があまりに固いので、ついにその願いをかなえてやり、いろいろと尊いことを説いてきかせた。長谷から帰つた妹尼はこの事を知ってひどく僧都をうらんだが、僧都はしずかに「今はただ一途におつとめなさい、執をおたちなさい」と教えた。冬がお

とづれ、また春となり、浮舟の一周忌をすませた薫は、明石中宮に参上してよもやま話をするうちに、横川の僧都が語ったという女のうわさを聞き、もしや浮舟ではないかと考え、比叡山参詣の機会にくわしく事情を聞こうとして、浮舟の弟の小君をともない、ひそかに横川に向かったのです。（以上「手習」の巻）

僧都は薫から事情を聞き、浮舟を軽々しく出家させたことを悔いたが、薫に彼女をひきあわせて、万一にも道心が崩れては、罪障のほども恐しいと思つて、そのことだけはと断る。しかし薫は、真意を告げて、決して色めいた気持はないからと泣訴するので、それではと、浮舟にあてて小君を紹介する手紙だけ書いた。翌日薫は僧都の手紙にそえて、自分も手紙を書き、小君に持たせて小野につかわす。小野では小君を喜び迎え、さつそく浮舟のところへ招じ入れようとしたが、当の浮舟はそれをさえぎつて、自分は一人の母にだけ

はあいたいが、ほかは誰にもあいたくない、と言う。尼君が薰からの手紙をひらいて見せても、人ちがいでしょう、今日は気分が悪くて拝見できませんと言いはって、何としても聞き入れない。小君は泣きたい気持ちをおさえながら、ひとりとぼとぼと山を下っていった。――。ここで源氏物語五十四帖は、終わるともなく終わっているのです。（以上「夢浮橋」の巻）